

夢想兵衛胡蝶物語前編

四

^ 13  
3658  
4









子の支の一片の席科を論じて。水雑炊のあまの清く。小人の支  
 の三文が智恵囊を敲て八文の醴より否る。酒ハをさるるけんも。  
 同よなぐどといふ冷好也。亦一竹と吸ふと死也。更科目雨も似たり。  
 東坡の洒落て掃愁帚。梵王ぬの呼くえて般若湯といふ。其の  
 味酒の三輪のむ。秋葉建方又六か門を極楽と定め終はけ身も  
 るくくと詠る。辞世の呉志は似るるとありとるの青洲の従事と。  
 腹臍に至るの謎。真一先生と三か一の隠語。彼飲中の八仙歌ふも。  
 李白の諸白の唐名よめど。萬葉の十三首よ大伴酔て子とも不  
 劣る。一盃ハ人酒と飲と二盃ハ酒酒と飲と三盃ハ酒人と飲む。声を  
 叩して泣上戸より。泣くを罵り腹立上戸笑上戸は捻上戸。吹引ぐん  
 吞。たいて齋の門の掃除は間酒拾得五徳をひけて小鍋よて端婦  
 どののめ。豆下のころは上戸の癖ありて。あて七癖あると死ハ堪情なる男山風  
 味元味高しといども。顛邊まで登るとあり。七ツ梅の一本生その香ハ鼻を穿  
 つとも。下戸の為ハ胸よりと。酒は目のる人由又酔がぬ前の杖をさるる。と  
 飲と死ハ轉は似て。坐の長くとんと死忘ま。ことと死ハ蜂ハ似て味ハ蜜のどりと  
 の。再林酒池の荷の盃。杯底の濁りよ漆む。小科ゆらねが。又免され大礼  
 由こそとりて整ふべし。あつと酔ど乱まぶると。真の酒宴といふべけと。強飲  
 國の習俗るれば。つらも酔て飽と死志と。生年少ハ柔和忍辱も。仏と  
 懐も。酔と紛まよひてのけ。氣恥のとも思ふ。おろの。のを。纏う。く。と。  
 天を窺ふ管をす。結加跌坐け。偏袒右肩。彼百目のげつる。も。只  
 反吐。よ吐らじ。眼と瞪。肘と張。涎と流。足と空。一歩ハ高く。



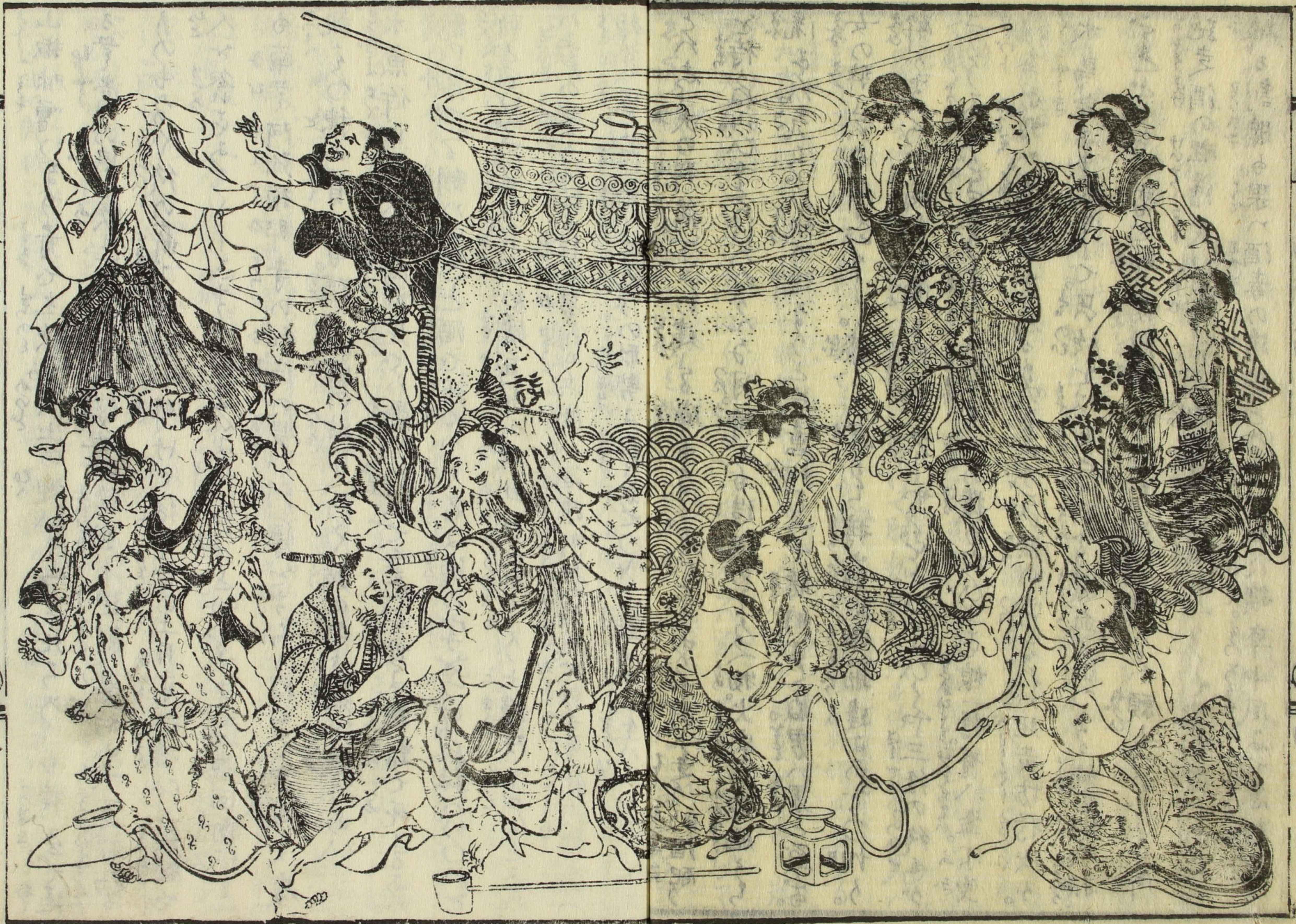
一歩ハ低ク。跟ク踏クとて。歌ハうたはなれ罵リ。あつらふらう。そり  
 うらう。命とちうらうらうの。勅定由著し。懐中の物を遺し。兩足  
 烟へ踏込。汁粉を食ひ。箸のぞく。酔ふまて。石と梳と。醒て流は  
 嗽げ。塵よまぶして。隠君子よ。似ど。その日の活業も。それか。乃は憐  
 子。火急の要用も。こまが。為は廢く。おた。一室よ。空を。れ。バ。家。走馬燈  
 と。疑ひ。惑ひ。を。それ。燈火。対ひて。火頭。ら。つ。の。万燈のぞく。筆を。採  
 ば。か。又。履。穿。バ。足。が。よ。ら。ま。よ。ん。年。つ。つ。ら。て。歌。子。の。こ。合。成。經。り。バ。  
 小娘。を。ま。へ。て。大。声。と。揚。さ。せ。波。々。と。戯。ま。て。眼。前。恥。め。ら。ま。さ。く。ひ。ま。さ。春。に  
 羽。目。又。柳。を。画。き。低。く。あ。鼻。唄。その。真。い。ま。ま。央。る。ら。バ。初。献。ハ。懸。懸。あ。く。  
 三。献。ハ。翠。く。九。献。の。生。碎。奉。性。か。の。む。や。ま。は。硯。蓋。を。あ。び。て。鼻。紙。は。累。々。と。坪  
 卒。の。切。身。は。袂。の。濡。る。派。厭。ハ。む。燒。物。の。朝。ハ。一。分。も。大。に。る。お。お。ひ。さ。け。物  
 の。果。子。ハ。甘。丸。を。娘。へ。ど。も。辞。せ。と。盃。の。さ。り。ハ。眞。肉。の。訟。ら。う。む。じ。く。未。叶。の  
 下。戸。あ。の。胡。越。の。多。ひ。と。り。て。疎。し。酒。の。肴。あ。り。肴。あ。れ。ど。も。の。海。泡。と。れ  
 一。倍。よ。三。倍。と。り。て。二。後。の。れ。も。い。ま。ま。彈。ど。れ。は。倍。よ。端。婦。を。り。て。昔  
 の。朗。詠。小。謡。と。変。じ。小。謡。を。ろ。て。流。石。唄。の。鼻。唄。を。ろ。て。卷。こ。る。一。穴。の。れ  
 釣。爪。柱。屋。を。中。空。鉄。炮。落。出。や。口。合。の。あ。り。ろ。い。の。餅。焼。ひ。も。ぬ。り。は。糞。で  
 餡。餅。と。ろ。り。て。嗅。く。元。よ。叱。ら。う。夫。婦。喧。嘩。も。夜。半。に。打。や。は。や。笑。ふ  
 中。の。宵。一。宵。四。隣。を。騒。く。も。夜。前。ハ。大。に。給。醉。す。も。前。後。忘。却。死。の。毒  
 千。万。の。造。他。の。厄。と。勸。解。ま。バ。人。も。ふ。ら。び。外。も。生。醉。の。女。房。ハ。生。醉  
 熟。て。ろ。扱。ひ。お。寺。の。納。豆。ん。や。う。よ。た。や。蘇。り。を。勝。み。て。又。物。を。さ。う。あ。げ  
 茶。碗。を。わ。く。懲。言。い。て。も。罵。て。も。茶。よ。も。塩。茶。ぐ。つ。ハ。醒。ま。れ。那。ま。ハ。瓶。の。落  
 ころ。い。く。頭。痛。痒。着。き。青。ご。め。朔。日。ま。ま。う。二。日。醉。晦。日。は。酒。屋。の。勅。定。由。

古今事林廣記 卷之四









江戸の浮世草子

江戸の浮世草子

五

五







のまど酒をくつりいり。一斗も二斗も飲た。さる彼虫の亦乃とて。人  
 腹中より九りの虫あり。伏虫といひ。坑虫といひ。白虫といひ。肺虫といひ。胃虫と  
 いひ。鬲虫といひ。赤虫といひ。蟻虫といひ。肉虫といひ。又尸虫あり。その虫人と共  
 胎内より生じ。又寸白虫あり。以上十一種。或は白虫の酒を好むといひ。凡そ虫  
 ども。腹中よりつと死上の旬八以上。向ひ中の旬ハ中。向ひ下の旬ハ下。向  
 下の旬ハ後。葉をくつり。月の初四五日の間。五更の時。用ひされば。效る。昔扁鵲の  
 子。子扁鵲といひ。菽医あり。酒毒の人を殺す。然れ。悉く。月上旬。馬の糞  
 味とす。或は蜀水花と酒を浸し。殊に大酒の人より。彼酒を飲せ。く。その  
 人立地より。下戸とす。りて。亦酒塩も。亦飲む。その人酒を飲せ。りて。元氣。即ち  
 衰へ。物志。き。思。蠱とす。り。ぬ。人。是。を。て。く。い。人。その。元。子。于。却  
 角を伐て。牛を殺し。枝を繫て。樹を枯し。異る。と。され。酒。残。削

客と正せ。聖人も。乱酒の病の憐ひ。酒を好む。り。飲む。酒の老よ  
 る。さ。り。上戸の奈良。債を食む。下戸の却。糟汁を好む。亦。是。残。ある  
 人。の。濟。羅。を。好。む。と。錢。る。た。の。の。却。美。服。衣。を。好。む。取。と。捨。る。ハ。異  
 り。ん。ど。も。彼。も。慾。る。り。と。れ。も。慾。之。か。る。亦。嗜。慾。を。捨。る。の。ハ。兩。年。の。壽。命  
 と。捨。ひ。飲。食。を。省。く。の。ハ。却。半。生。の。氣。力。を。肥。と。人。と。く。慾。る。の。の。の。

志。と。す。の。の。志。は。ま。と。と。粮。生。ハ。人。生。と。く。世。の。有。り。久。く。に。發。ハ。水。乃  
 氷。と。る。り。て。形。を。る。と。く。は。その。氷。や。雪。ハ。妻。君。を。毎。日。か。り。り。消。て。旧。の。水  
 也。と。い。ひ。の。の。け。ま。と。と。是。を。氷。室。と。す。お。け。の。夏。ま。ぐ。由。消。う。せ。と。志。う。れ。ハ  
 氷。と。雪。の。粮。生。ハ。氷。室。の。の。人。の。粮。生。ハ。嗜。慾。を。省。く。の。の。論。究。め。之。曉  
 易。人。の。性。ハ。若。る。の。の。の。の。莫。私。子。此。の。礼。を。打。て。も。さ。う。ふ。ま。じ。と。る。と。礼。



名を画ておけり。たまはく禁酒するものも。ちりり破らんと紙糊して。神仏へ  
 ておけり。のま。たまはく禁酒するものも。ちりり破らんと紙糊して。神仏へ  
 誓言がとけり。のま。ちんぜん。の札へ。居を画ておけり。瘡を癒す。禁酒の  
 むれと糸。精をぬぐ。その神仏が。目よ見えぬ。衣よ真よ糸よ。我を立して  
 禁酒を破る。これら。おのの。胸前よ。の。と。臍の下よ。の。と。一生志  
 ぬ類。酒は。魂を奪。ま。と。只博く。見て。等。行く。古よ。明。より。義理  
 通る。人の。酒を。飲。乱。る。て。戯。譚。を。も。謹。と。る。病。と。い。ども  
 癡。狂。せ。ど。奸。人。も。これ。を。遊。さ。む。狐。狸。も。魅。し。ぬ。も。圓。ま。か。る。人。を。稱。し。酒。中。の  
 仙。とい。ふ。け。こ。強。飲。國。の。か。り。酒。よ。呑。ま。て。乱。酔。し。殃。危。と。釀。さ。る。も。  
 嗚。呼。お。そ。ろ。慎。ま。と。と。後。く。説。く。け。て。も。情。を。も。生。酔。の。り。る。ん。が。  
 真。実。よ。い。づ。く。の。る。今。一。言。い。ふ。る。と。六。横。を。も。う。と。巻。ま。げ。う。ぬ。ぬ。面  
 魂。を。と。睨。つ。け。て。又。莞。然。と。笑。ひ。お。牙。を。ぬ。野。夫。を。い。か。り。の。よ。せ。笛。曲。と。香。の。物  
 酒。が。飲。め。ぬ。と。古。人。綿。考。も。い。や。や。る。の。ん。況。て。生。る。が。引。導。を。し。て  
 ち。ま。り。る。陳。紛。漢。ハ。吹。ら。う。は。酔。が。醒。る。二。百。が。鹿。菜。を。買。ハ。あ。め。下。と。う  
 へ。あ。う。ま。う。る。理。屈。を。の。と。て。さ。い。の。が。え。た。ま。う。の。の。奈。良。茶。屋。の。煮。豆  
 どの。あ。め。下。堅。と。い。つ。て。も。大。槩。が。の。め。ん。ど。賢。人。も。も。る。人。でも。貪。着。ハ。ぬ。  
 潔。く。受。て。一。盃。飲。つ。し。い。ぞ。と。い。ふ。あ。ま。を。飲。む。と。平。ら。の。あ。ら。く。出。ろ。と。罵。り。  
 言。ハ。百。千。の。霹。靂。霹。靂。又。異。る。ぬ。養。兵。場。ハ。の。勢。ひ。は。辟。易。し。て。傍。枝。打  
 是。取。用。也。い。よ。お。ま。か。の。と。ん。と。あ。う。も。撲。投。を。ま。う。け。し。と。御。入。て。の  
 御。後。も。これ。も。終。り。と。い。ひ。く。下。の。る。ま。の。肩。貸。て。醉。漢。の。杖。と。る。の。り。さ。し  
 の。と。た。の。小。間。物。見。世。の。掃。除。し。て。い。づ。く。も。目。を。送。ま。さ。ま。も。か。く。の。憤。り。の  
 とも。む。か。く。ま。で。廣。い。強。飲。國。よ。せ。あ。て。ひ。ら。の。醒。ま。る。の。の。の。ぬ。ぬ。ゆ。あ。の。







師河原の底深と酒残の高名揚焉。十六人の酒の才子を引つきては  
 團入のえんちりせり神とらととろまるもまらぬ長物残は羨忠兵衛の退  
 屈してそより案内の何命を以て約二十町あきりありて天酒山美祿寺と  
 して大刹あり大門のまじり許葦酒入山門といふ戒檀石をみりりしと  
 りと神くまは酒林流る霞汲入とて堂塔をみりり一盃飲ぬが久  
 さん堂ちんまのめび七面也六尺有るの五體堂也内損七斗のかん堂向  
 はんゆる山とちりちりみり井は四方の赤池田伊丹の諸自蓮華さうれと  
 ら甲小秋酒の標と二粒と積のげら五重の塔の飯菱さく酩酊堂  
 覺とるのと下滅法大酒の灵地なり折ふ茶酒如末の開帳あり瑞璃壺  
 のりも酒壺と老若男女歩くと連び脂呑の善の徳は推り群集の押  
 合へのひ合はも奉とらび然後盃の塞残は純子のつり行文と何  
 がふとて手とてたかぐんで外の大盃も一遍ちりり灵宝はさく左りが利  
 携ちちり一番中の関向道隆公の鳥の盃出知を同が大鏡乃巻の六合  
 入り二番の浪は免の盃和田が酒り小林ののさくええても七合入りさ  
 三番の碗久がびつろ丸八合入り四番の乃北黄坊か蜂龍りり一併  
 入り五番の白葉君さくこれ浮瀬のゆりゆりの吉野が蟹の盃の顧  
 太初が瓶さく一人の中ねじり鶴鶴盃飲ぬも器器の盃八張姓も子  
 氏かびつれ彼李迪之が九品の内蓬菜盃は海山螺并仙螺菟子危  
 慢巻何金蕉葉は玉蟾見李宗関が荷葉盃質はさくねと流る  
 受つ曲水の觴は得陽の江橋をさえて月の鏡は芦の葉の呑口付し  
 猩々盃和漢の灵宝教とそくそく恭く飴とそく無礼講中麻上下  
 の片肌脱て手拭碎すれ縁起いひとそりめく亦とゆ盃のちりひ

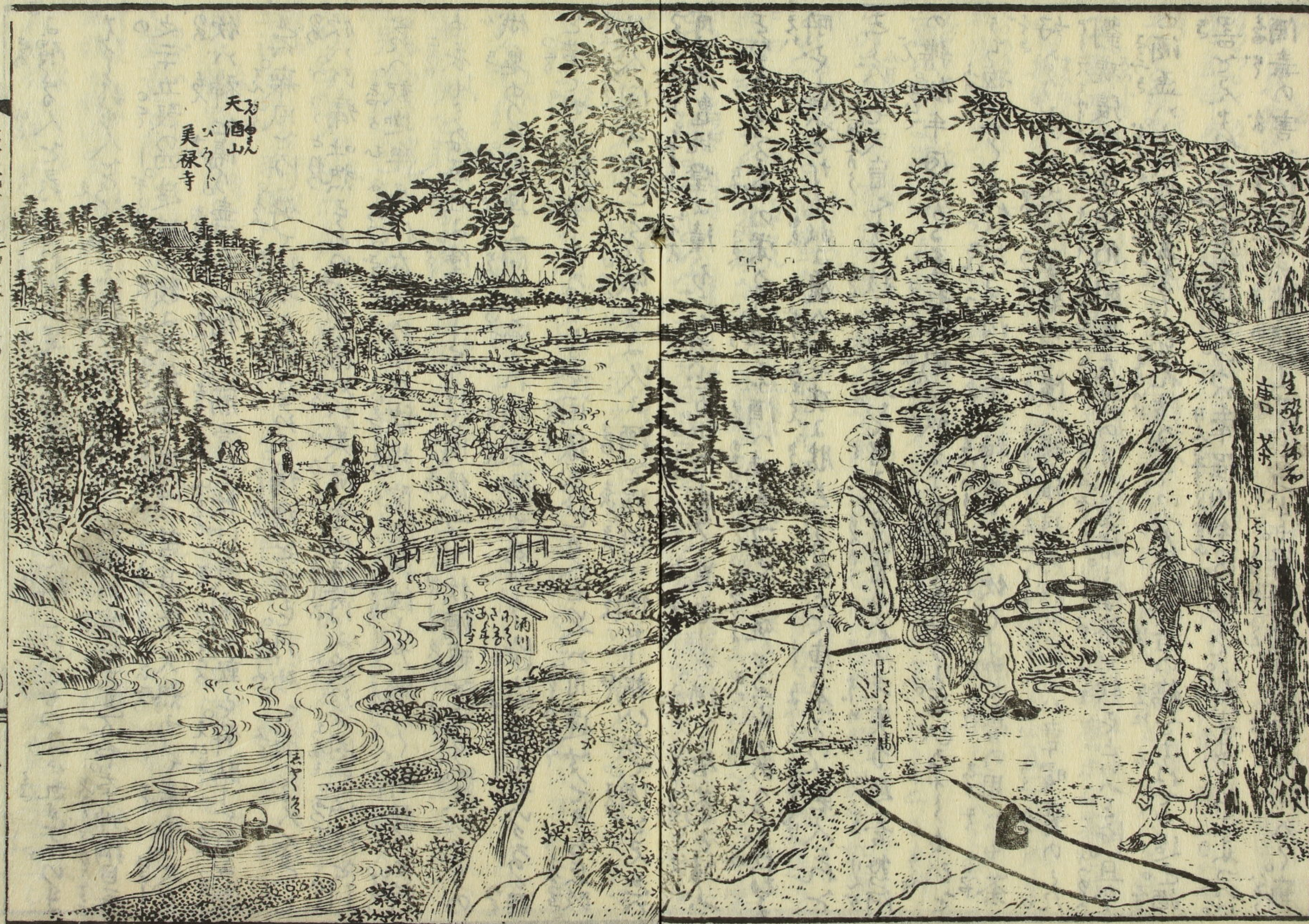












天酒山  
美祿寺

古河天酒山美祿寺

生研池

唐茶

酒  
川

天酒山

唐茶

生研池











びく。相承しく今に至る。曇橋外ハ蜀英あり。諸方より是を酒曇と  
 り。或ハ芭蕉泉禪師ハ杖ハ酒瓢引く。山中を往来せり。馬租ハ  
 浮和尚黄檗也。噎酒糟の紙ちりちり也。或ハ曹山自家の酒或ハ青峯  
 蒲萄の酒。色も香も飲むるぞ。ある移餅ハ故より由り。陶淵  
 明ハ大醉漢。みる芥一の達磨と喝ぶ。あつた客人こそを憎む。天下  
 を失ひ牙と亡ぶも。是酒の馬行とも。茶を賞るをそろえねと。  
 りのせものごと。愛忠兵衛ハ掌と拍く。大さく笑ひ彼禁尉の両天子ハ  
 酒とあつて天下を失ひ。義和の二氏ハ酔ふまで。竟るその牙を喪ひし。  
 これハ人のよくある。不就中村王ハ酒を池と糟を丘と。牛飲の捉ひ  
 ざるせしハ畜生ハ異なり。どろろ子澄据である。おの飲とりの酒ハ改て  
 挿る。さうさやろ。む。堯帝酒を飲で千觴を累し。その仁万

古の今ハ溢る。孔子も百盃と引く。その徳四海の外ハ。皆ハ後狄酒  
 と醸され。禹王賞て妙といひ。杜康酒と造り。これ武帝入り  
 憂とる。又高宗ハ殿の中。與夢ハ麹麩とぬる。ひね亦仁徳  
 帝の如時。曾保利。曾保利といひ。兄弟酒と造る。のオあり。く  
 則脚酒と造る。酒看郎子の号と賜ひ。ハ子孫酒部也  
 と氏と。吉野の國。栖酒應神。よと。室山の搦花酒。後中  
 不起。酒ハ清。みみりて聖と。濁と。りて賢といふ。聖賢の道酒。よ  
 のり。飯の後。ハ中酒といふ。研りて。確る。これ中る。り。中庸の道酒。よ  
 あり。史記。ハ酒の徳を賞て。百菜の長といふ。博物志。ハその功。ん  
 え。王甫。張衡。馬均の三人。ハ酒。ハ霧を犯して。山。結。を。り  
 正のり。り。一人ハ飽。を。飯。と。食。ひ。一人ハ志。り。酒。を。飲。み。一人ハ茶。計。















酒と好むとよどむ飽ちをどめりしよ。あ。対山は入りて木を伐るふ。醴泉のうて流し出づ。菊て飲ばれ酒あり。飲びてを毎日は飲て。家よりて酒あり。若し又と養ひあれ。そのう。都はつえ。六天皇ふ。賞をのひて。養老と改元あり。ある。國史は載らぬ。その孝。世は隠し。亦茶の酒と醒るといふ。酒飲ぬ人のう。酒後又飲茶。ハ腎と傷り。腰脚重墜る。勝既冷痛。痰飲水腫消渴と患。王。あ。ハ藏器の説本草をえて。と。晋の七賢八達あり。唐。五六逸八仙あり。或ハ漢家の七十二人。又金谷の二十四友。劉玄石が。一千日。淳于棼が七八斗。王績ハ酒徑と著し。劉白倫ハ酒徳の。頌あり。元次山ハ三吾ハ隱也。歐陽修も一壺と貯ハ。酥酪醍醐と。酒の長。客人酒中の趣と。と。茶ハ酔のハ。破。と。か。と。と。

袖うらんと。柱より。月と。同く。竟は。あ。び。の。の。と。憂。兵。衛。ハ。この形勢ハ胸のりや。や。の。心。と。ね。と。款。手。の。く。な。つ。て。ハ。ヤ。ク。と。な。く。國ハ此國の人気。凋達る。れ。も。短慮。や。て。物。あ。つ。と。ひ。と。あ。も。奴。心。ハ。棄。し。く。障子と踏折り。血。痔。と。う。り。碎。を。理。非。ハ。拘。と。さ。る。の。妻。ハ。ま。よ。ま。の。あ。つ。の。ど。れ。も。片。意。地。と。さ。り。て。人。の。徳。と。突。と。ど。虚。空。を。り。つ。て。ア。と。る。須。弥。と。り。つ。て。舌。と。る。薄。を。唇。と。弄。ひ。く。と。あ。と。大。お。ひ。ひ。る。と。の。も。女子と生。碎。と。ハ。養。ひ。か。く。夫。危。邦。あ。入。り。と。乱。邦。あ。居。る。む。か。る。如。く。虚。と。長。居。せん。ハ。昔。孟。の。と。い。え。り。言。い。く。牙。が。ひ。し。く。ま。り。出。旅。宿。へ。も。ま。さ。る。む。ど。港。口。と。う。て。ま。る。む。ど。は。忽。途。ハ。端。と。い。ひ。て。名。も。あ。く。ぬ。山。路。よ。り。け。入。り。あ。け。と。も。く。里。へ。出。と。い。は。ま。ち。く。遠。く。左。と。見。く。右。と。見。く。ま。い。も。人。迹。と。え。る。深。山。の。れ。



びるさふよりゆめよりあつ。柳室もゆめど楓葉もあつた酒の酔ふと  
 怪し。又走ると十町のまゝ。個見え山半腰より生れぬ松は雲  
 とくゆこまは両足を結び着て。ぶらぶらりりりありあり。近くよりく  
 こまをさるよ。こま人あり世は首益るりのめれど足踏るとんずも  
 及びど。ちや律断さうとえとばさるうて。喬を三後みりて鼻噴  
 とうと入形容。さなううね人異るうね。あやしくも又不佞はありひく。  
 抱さあげつ索と解さそ。扶おろしく。その衣を脱ぐ。この人甚不真  
 て。これハ山麓の麓ある樵夫あり。強飲團は生きたるがら。家を買  
 けし。バ碎入るとうの酒を飲ど。人も鹿菜と負て里へ。些の酒  
 よのつれとまじ山風は吹まされ可憐酒の急北は醒人との遺憾  
 さるえさうとく構ふる。倒よまじりハ飲る酒との母せん為あり。あつる

小江辺。つらふととまじりど。かくしあつる。あつととてハ情あり。と  
 頼ふらうしく。咳が羨あ兵衛。呆も果人。その危を欲忘るハ嗜慾  
 の害より。や酒を強さうとて倒よまじり。脾胃と害ハ血を  
 のこの母さあ。りりすて解さるべし。よめい雨の索をさるが。又玉の結  
 由共は絶ん。これハ日本國の旅人。羨あ兵衛と叫るりのる。ら  
 浦島仙人の權護よ。うて少年。色慾のニ々團と抱壁し。ちうごら  
 の強飲團と抱びて。頼は禁酒とさむ。むさど。碎ぶまのりりり。ハ  
 ひさりも教は後みりのる。嚮は義祿寺の母ありあり。あつる。老人と  
 ちのめら。茶飲をなごらととどく。あひし。彼も又口強馬あ。笑入  
 じ。さても。道行もねが。後。海は浮。貪婪團へ渡るとて。  
 港口とさうく。ま。途は送入て。山跡は入りぬ。山人あり。これ





万世了也八

山崎



山崎







末あつてふとね盃あり。狂きてその人の非とあつてふとねバ尻の居とぬ  
 高脚杯あり。酒意は招きて。遅く到着せぬの信と失ひ砕く相争ふ  
 之れハ系と失ひ醒て勸解るとぬハ勇と失ひ酔前して相罵るとぬハ  
 仁と失ひ強て飲さんとよるとぬハ礼と失ひ酒量多くてふとねとぬハ  
 智と失ひされを候てきり非とあつてハ酒はちりぬハあつて小人罪  
 ろり。盃を抱て罪あり。且その咎ハ酒はあつて。飲りの賢愚はあり。  
 人畏ぬとぬハこそと酒は帰す。酒の友は免さる。之れハ飲ぶるまは  
 福あり。已とあつてざるもの改てよる。むら白物も醒てふとねめ。その  
 非とあつてハ酒の徳あり。人その乱酒の醒るより。日よか。の非とあつて  
 過とあつてびとるものぬ。酒ハ固よ百葉の長あり。その毒とあつて所  
 以ハ火の燒水の濁るとをこし。譬バ一升入る瓢は。二升の酒と盛るとぬハ。

盃とどとつとふとる人。ふと酒量とあつてその量よふとねがぬ。よ  
 五臓は溢して命と失ふ人。よ酒量とあつてぬハ乱れを乱れとあつて  
 酒聖とぬ。延喜十一年六月十五日。亭主院。酒と賜ひ勅して二十  
 盃と限とぬ。召よ怒ぶるもの。僅よ八人。参議藤原仲平。兵部大輔  
 源嗣右近衛少将藤原兼茂。藤原俊蔭。出羽守藤原経  
 邦。兵部少輔良峯。遠視左兵衛佐藤原伊衡。数伊平希世  
 ホあり。その中希世ハ門外に碎く。よと仲平ハ殿上。小間物店を  
 生し。その餘の徒も。これと亡心して。言舌度とぬ。一北と端ど。後  
 一人。竟よ乱れを抽賞とて。駿馬と賜る。長谷雄卿の賜酒  
 記よ見えぬ。げと酒ハ量なり。只乱るよ及ばぬと。聖人ハ宣ふ。ぬ。  
 こそよつとく。ぬ。よ伊衡ハ三十盃の酒量とぬ。その下。本よ二十五







まづこの慾と断てその利害と志すべし。西方の聖人多く此の事淫  
 せむ飲まざるやむべし。淫酒の固又警び。之を責むる只害の之れ夫情  
 也。釈氏の淫酒の二と禁じて人情は情といふ人亦迷へる。且酒  
 備り力の人との非とある。茶は酒の人の人。人のまこと其の非とある。且酒  
 茶は元來貴人なる。貧賤の所行とある。人為の控ひるべし。兩雅を  
 宗とて古器をのりめ。金銭を費する。眞の茶はあつて法式は泥とて  
 そと控ひるべし。眞の茶はあつて陸鳴漸の當時茶は名高く控ひる。李  
 李季御が為し恥しめ。毀茶論を著し。亦終は茶をいひて富  
 貴の人まじく清貧剛雅の控ひてこそ。やめつてしくもあつた。貧  
 賤の人貧賤の控ひて何のまじりたるあり。其の初とて。貧  
 乏と富貴の控ひて羨む。赤品の茶器を弄んとする。その害酒

うり甚し。朝早く起て漱ぶ。晩茶の吐花を嗅ぐ。夜せ東窓より入り  
 る。旭は向ひて一碗を喫し。その茶も又酒もまたとめ。彼も餅も又酒  
 是も由香べし。とて。強飲固の茶を志す。其の酒を排す。客人の  
 酒と好まざる。其の酒を憎む。好憎ありて相争ふ。人の公論  
 不あり。客人酒中の教とある。又その茶は酔へて。嘔る。酔へて  
 人の酒を醒えんとす。是れも又酔へる人なり。さづか茶は酔へて。醒  
 えて。人の酒を醒えしむ。さうさへ至らぬ。か暇ありて。とめんと  
 すれば。憂は兵馬の年の舞足の端とて。其の酒を醒えしむ。慌忙つ。樵夫を  
 其の酒を醒えしむ。腰を引め。それが眼あり。豪傑と志す。野  
 夫も功者のつとめ。其の酒を醒えしむ。忘る。其の酒を醒えしむ。野  
 夫も功者のつとめ。其の酒を醒えしむ。忘る。其の酒を醒えしむ。野



中ん先生のそ早由。あつち海へくそとりの。樵夫えくして打  
 点氏。又山の酔醒山と唱へて古今独立の奇峯なり。思ふるも  
 酔て又山ふ登まは。忽ちさへ醒して。その非を曉せ賢人醒  
 て又山ふ入まは。酔を復く。その樂を助く。さへ酔醒乃名  
 のり客人らふ至て。さめてその非を曉りゆひゆ。こ論の高はあどど。  
 山の哭のさだあり。まうはも鳴呼るまど。おのれ誦糖同八と唱。凡  
 酒を暖るふ熱うどど冷うどど。その間をさふ。同とい。同ハ則中庸の  
 義あり。それ酒を好し。酔を醒。その間を樂まうて。同をりて名  
 と。又美祿寺の海よりあ。客人と酒茶を論。老人ハ律園蘭  
 叔といりのる。彼ハ別号と忘憂君といり。頗る器あり。凡この  
 常又飲仲間と。彼とそれ。凡庸の才。物の数る。凡この  
 國の古より。酒聖酒仙。客人を用の兵を好ま。却る。作の人ハ  
 笑ふ。そくゆりゆと感えて。後武兵衛ハま。驚き。それ。こ  
 へ。貪婪國へ推渡りて。亦一旅行。せやと。おく。道と。ま。  
 進退ら。突りぬと。卿ハ同ハ。笑ひ。孟子境。入る。大禁  
 と同といり。聖人の。物と。推移。客人強飲の。困  
 枉。その。その。貪婪國ハ。海  
 上三千餘里。渡海り。と。容易。ま。由。彼國の。熊鷹  
 と。山へ。物。毎。古巢。へ。と。あり。  
 する。然。熊鷹。貪婪國ハ。飽。困  
 る。彼。熊鷹。放。と。命。の。け。合  
 る。一。速。彼。地。へ。命。の。け。合



まどと。といひも果ぬ。忽地颯と羽あじまて天狗や。鵬や。おそら  
げる鳥翔さかり。爰悉兵衛を久。能で虚空を。のりてゆく。

○總評

世は酒を飲で酔ざるもの。あつても。いま。劉玄石が。だれた。あ  
ど。酔て亦醒ざるもの。あつても。いま。屈原が。如き。奴え。ど。し  
劉玄石中山の酒家。酒を沽し。とれ主人。千日の酒を。よみ。酔て  
家。よ。奴え。バ死。よ。が。如し。その家。竟。よ。れ。を。葬。る。後。酒家の  
あ。る。日。を。揣。つ。て。ぬ。り。て。こ。ま。を。え。ま。ば。三。年。以。前。よ。葬。る。といふ。  
驚。き。て。その。故。を。告。墓。を。後。に。棺。を。開。け。ば。玄石。欠。伸。し。て。初  
て。醒。る。その。棺。を。開。く。と。れ。酒。氣。よ。打。こ。て。酔。り。の。亦。百。日。起。ぶ  
といふ。記。又。楚。國。の。屈原。ひとり。醒。る。楚。の。君。臣。も。酔。を。れ

裏。の。ち。ぢ。ん  
な。又。屈原。と。容。と。と。屈原。既。よ。放。ま。て。江。潭。よ。抱。び。も。く。澤  
畔。を。冷。み。て。顔。色。憔悴。形容。枯。槁。魚。又。を。見。て。説。諭。せ  
と。も。聽。ど。遂。は。汨。羅。に。投。り。といふ。夫。中山。の。美酒。千。日。玄石  
を。酔。し。て。玄石。を。殺。さ。し。楚。國。の。濁。酒。一旦。屈原。を。醒。し。て。屈原。を  
殺。せ。り。その。な。よ。一人。中。が。醒。ん。よ。衆。人。の。酔。さ。り。あ。る。と。酔。び。て  
醒。ん。よ。い。い。く。難。く。し。酔。て。川。へ。も。ま。る。の。り。醒。て。淵。へ。投。む。の  
り。と。奴。れ。を。屈原。が。奴。れ。の。掃。ら。る。り。



